

海外留学 in コーネル大学 ～戦士の帰還～ 安藤風馬

僕は学振の海外挑戦プログラムによって行われた 3 ヶ月間のコーネル大学の留学を終えて帰国いたしました。その中でもたくさんの出会い、別れそして苦悩の日々がありました。何もかもが日本とは異なる地、そこで過ごした平凡な学生の日常を示します。

「生活面」

今回宿泊していたのは、シェアハウス形式の家に泊まっておりました。最初はルームメイトとなるか不安でしたが、いざ到着すると優しく受け入れてくれて、なんと初日には夕飯をデリバリーで奢ってくれました。ちなみに奢ってくれた食事を節約のため一週間かけて食べましたが向こうの人からなんと思われたのでしょうか…。混沌と狂乱に満ちている NY と思っていましたが、人々の心には確かに温かい心が宿っていると確信しました。また、ルームメイトと話す機会もあり、何を言っているかわからないけれども何かを伝えたいことだけは分かるようになりました。たぶん、最初に話したのは「キッチンをもう少しきれいに使え」だと思います。片付けできないから仕方ない。



綺麗なキッチン。これが地獄に染まるのをまだ誰も知らない！

「移動について」

基本的に歩きですべてをこなしていました。学校まで往復約 10 km の道のりを月～金曜日まで毎日行い、休日もスーパーまでの道をすべて歩き続けました。別にバスが無いわけじゃないのです。ただバスの使い方が日本と違ったら焦るからそうなるくらいなら歩くといったネガティブな思いで歩き続けたのです。そうつまり、90 日間毎日 10 km 近く歩いたのです。毎日毎日ひたすら歩き続けたおかげで帰国する時重い荷物を持っても屈しない脚力を手に入れたのです。なんというサクセスストーリー、研究者にあるまじき脚力。痩せたかどうかは別の話。

「料理」

未だ成長せず、作り上げるのは茶色いなにか。

「空港の過ごし方」

ここまで読んでくれたのならわかると思いますが、基本的にネガティブ。何が起こるかわからない海外では臆病なくらいがちょうどいい。そんな中、帰国しようと準備する自分、飛行機に乗る時間は 8 月 30 日の 13 時なのに 29 日のお昼から行動開始。まず大学を超えてバスターミナルまで重い荷物を抱えて歩く、ここまで来たら意地でもバスを使わない。イサカから NY まで 6 時間強の道のり、そこから空港までタクシーで 2 時間弱タクシーの運転手に「お前はフィリピン人か？」と聞かれたのには大ショック。お前の子孫まで呪うぞ。そして空港に到着。ここで勘のいい方は気づくでしょう。そう、まだ飛行機搭乗まであと 15 時間近くもある！ホテルは取っていない。始まったのである《15 時間耐久地獄の空港ターミナル

海外留学 in コーネル大学 ～戦士の帰還～

安藤風馬

泊》何故ホテルを取らなかったのか今でも謎。しかし、始まってしまったのなら戻れない。幸い今回泊まったターミナル 1 はフードコートや充電場もありネットなどの苦労はしませんでした。ただ徹夜で冷える体温、増えていく体力的疲労、並みの精神では耐えられません。しかし、私は乗り越えた。何故か！毎日の 10 km の歩き、そこで得られた体力を使うことで乗り越えたのです。しかし、絶対お勧めしません。ゆっくりホテルで休みましょう。以上で海外留学の時に起こった出来事ダイジェストでした。生きて帰って来られてよかった。

2019 年 9 月 2 日 安藤風馬



送別会をしてくれた研究室のみんなの優しさと夏の思い出を僕はきっと忘れない。